

Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



日本に生きるオッサンとして
世の中に感じた驚きを大事にする

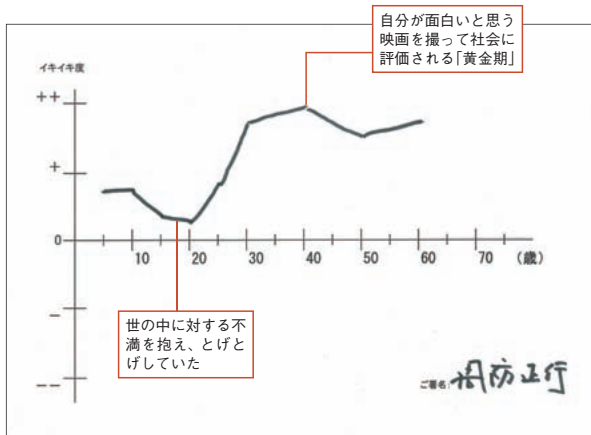
周防正行氏 Suo Masayuki

映画監督

Career History

周防正行氏の
キャリアヒストリー

1956年	0歳	東京都生まれ。少年時代は野球に明け暮れた
1970年	14歳	肘を痛めて野球を断念。頻繁に映画を見るようになる。高校卒業後、2年間の浪人生活を送る
1977年	21歳	立教大学文学部仏文科入学。映画評論家・ ^{はすみ} 蓮實重彦氏の講義に影響を受け、映画監督を志す
1981年	25歳	大学4年生時に高橋伴明監督に師事し、卒業後も助監督として年間10本以上の作品に参加する
1984年	28歳	成人映画『変態家族 兄貴の嫁さん』で監督デビュー。映画ファンから注目される
1989年	33歳	『ファンシイダンス』で初めて一般映画を監督する。1992年には、『シコふんじゃった。』で日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞
1996年	40歳	『Shall we ダンス?』で日本アカデミー賞13部門独占受賞。2005年にはハリウッドでリメイク版が公開された
2007年	51歳	刑事裁判を描いた『それでもボクはやってない』が公開され、反響を呼ぶ。2011年から2013年まで法制審議会の「新時代の刑事司法制度特別部会」の委員として全30回の会議に参加
2014年	58歳	8作目の監督作『舞妓はレディ』を公開



直筆の人生グラフ。映画監督を志した大学時代から上昇。仕事への責任感が大きくなるにつれ上昇率はゆるやかになるが、大きな下降はない。

社交ダンス教室を舞台にした大ヒット作『Shall we ダンス?』、刑事裁判の問題点を描いた『それでもボクはやってない』など独自の視点による作品で、国内のみならず海外でも高く評価されている周防正行氏。寡作ながら、コメディから社会問題に切り込んだ映画までバリエーションに富んだ作品を世に出し、新作公開のたびに世間の話題を集めている。

映画監督としての原点は、「自分が興味を持った世界を人に伝えたい」という思い

少年時代は野球に打ち込んだが、「やればやるほど自らの能力のなさに気づかされ」、中学2年で断念した。

「一生懸命やるものがなくなり、どうしたらいいのかわからないまま大学を受験。二浪で入った学校も第一志望ではなく、入学後も挫折感でいっぱいでした」

そんな時期に心のよりどころとなったのが、映画だった。映画監督を志したのは、大学の一般教養課程で映画評論家の^{はすみ}蓮實重彦氏の講義を受けたことがきっかけだ。

「映画は僕にとって楽しみであったり、人生のヒントをくれるもの。その素晴らしさを感じていただけに映画を難しく考え、立派な哲学も洞察力もない自分には撮れないと思っていました。ところが、蓮實さんいわく、映画は意味を読むものではなく見るもので、映っているものがすべてだと。『裏を返せば、僕自身が興味を持ったものを素直に撮れば、映画になる』と解釈し、それならば、自分にもできそうだし、作りたいと思ったんです」

「映画制作の世界をのぞいてみたい」と、大学4年生の秋から映画監督・高橋伴明^{ほんめい}氏に師事。卒業後もさまざまな現場で、助監督として成人映画の制作にかかわった。

「収入ははずめの涙ほどしかなく、体力的にも厳しかったけれど、ものづくりの現場に身を置くことが楽しくてたまりませんでした。はたと立ち止まったのは、28歳で監督デビューとなったとき。映画への憧れだけでこの世界に飛び込み、撮りたいものが明確ではなかったため、何を撮ればいいのかわからなくなってしまいました」

悩んだ末に、「自分が興味を持った世界を伝えたい」という映画監督を志した原点に立ち返った。「まずはいちばん好きなものを映画にしよう」と決め、小津安二郎監督作を徹底的に模倣した成人映画『変態家族 兄貴の嫁さん』が生まれた。同作は蓮實氏に絶賛され、周防氏の名は映画ファンの間に広まった。

作品が立て続けに評判を呼び、
新たな映画へのハードルが上がった

『変態家族 兄貴の嫁さん』公開後は「監督以外の仕事はやらない」と決め、しばらくはカラオケビデオやアダルトビデオなどの監督をしながら生活した。

「『変態家族』を撮ったとき、監督の仕事というのはこんなにも楽しいのかと知りました。一般劇場用映画の助監督をという話もありましたが、それよりカラオケビデオであっても自分ですべての意思決定をして作品を作る監督でいたいと思いました」

31歳で伊丹十三監督作『マルサの女』のメイキング番組を制作。ついで、映画会社のプロデューサーから声がかかり、『ファンシイダンス』で一般劇場用映画に進出した。次に監督した『シコふんじゃった。』が評判を呼び、今度は少女が主人公の映画を作ろうと、宝塚歌劇団や舞妓の取材を始める。ところが、電車の窓から社交ダンス教室を見たことでその世界に興味をわき、作ったのが米国でもヒットした『Shall we ダンス?』だ。

「自分が『面白い、楽しいね』と思うものを追求し、それが多くの人に伝わったんですから、最高ですよ。黄金の30代です」

半面、作品が次々と世に出たことで、新しいものを作ることへのハードルが高くなり、40代は「絶対に撮りたい」と思えるものになかなか出会えなかった。そんななか、新聞で痴漢冤罪事件の記事を目にしたことが、再びメガホンをとるきっかけとなる。

「僕は映画のネタ探しはしません。ネタを探すと、映画のスタイルにあてはめて現実を見てしまいがちです。そうではなく、日本に生きる1人のオッサンとして世の中に感じた驚きや疑問を大事にしたい。だから、このときも最初は単なる興味で取材を始めたのですが、日本の刑事裁判は調べれば調べるほど驚かされることばかり。これは『映画にしなければ』と思いました」

3年半をかけて取材しながら脚本を執筆。前作から11年を経て公開された『それでもボクはやってない』は大きな反響を呼び、数々の賞を受賞した。



撮りたいものしか、撮らない。
それだけは守り続ける

『それでもボクはやってない』を撮り終えた後も、日本の刑事裁判への関心は消えるどころか高まった。

「社交ダンスであれ、刑事裁判であれ、僕の興味の対象は常に『人がどう生きるか』ということなんですよ。でも、歳を重ねたからでしょうか。『楽しく生きるっていいよね』というところから発展し、『国家と個人』『人権』といった根源的なものに関心が広がりました。表現者としての責任感もあるのかもしれませんが、それ以前に個人としてこの国のあり方が気になるんです」

2012年には検事の取り調べシーンをリアルに描いた『終の信託』を公開。また、2011年から3年間は法制審議会の特別部会で委員を務め、2015年4月に閣議決定された関連改正法案を作るための議論に参加した。「日本の司法実務では必ずしも人権が守られていない」という現実を伝えたいとの思いから会議の体験を書いた本も出した。

「自分の興味をそのまま表現しても、人にはなかなか伝わらない。『映画は見る人のもの』と肝に銘じ、

いかに伝えるかを考えて映画を作り続けてきました。本の執筆も基本は同じです」

社会問題に切り込んだ映画も、周防氏の手にかかるととっつきにくさを感じさせないのは、人に伝えるための表現手法を磨き続けてきたからだろう。2014年に公開された最新作は舞妓が主人公のミュージカル映画。次回作もこれまでの作品とは異なるものを予定している。

「自分の表現の枠を広げたいから、ジャンルにはまったくこだわりません。ただし、撮りたいものしか撮らない。それだけは守り続けていきます」



2015年4月に発行した『それでもボクは会議で闘う——ドキュメント刑事司法改革』(岩波書店)

映画にも、現実にも さまざまな登場人物がいて、そこに物語がある

大久保幸夫 リクルートワークス研究所 所長

お会いするにあたり、周防氏の新刊『それでもボクは会議で闘う』（岩波書店）を読んだ。法制審議会の委員に選ばれた周防氏が、①取り調べの可視化、②証拠の全面開示、③人質司法からの脱却、という司法改革を進めようとするが、さまざまな抵抗があって、改革案は骨抜きになり、むしろ現状を追認するような案が答申されていくというドキュメント・実話である。

読みながら私は、現実の話でありながら、あたかも映画の脚本を読んでいるかのような錯覚に陥った。登場人物である、官僚、法曹関係者、学者、非法律家のそれぞれが、一編のドラマの登場人物のように設定されて、役割を果たしていく様子が描かれているからなのだろう。

ふと物語論という学問分野のことを思い出した。物語論の始祖であるウラジーミル・プロップは、ロシアの昔話を分析した結果、それらの物語には共通する構造があることを発見した。それは登場人物が、①敵対者（主人公を妨害する）、②贈与者（主人公に恵みを与える）、③補助者（主人公を助ける）、④王女（主人公が探し求める対象）、⑤派遣者（主人公に依頼する）、⑥主人公、⑦ニセ主人公（王女を騙して連れ出す）、の7種類に類型化できるということである。

日本の時代劇にもお約束のパターンがあるし、恋愛ドラマにも決まったパターンがあることはご承知のとおりだ。

映画監督だからこそ、審議会という一般読者には馴染みにくい素材を、うまく物語仕立てで読みやすくしたのだろうが、一方、現実とはそういうものなのかもしれないと思うのである。登場人物の種類は決まっていますが、そのなかで主人公としての私は何か目標を追い求めるのだが、邪魔する人もいれば、助けてくれる人もいます。そういうものだ。

このキャリアクルージングでは、キャリアデザイン（キャリアプランニング）に関する一般法則を、著名人のキャリアを事例にしながら紹介してきたが、キャリアデザインこそまさしく、自分の未来を物語に仕立てて、登場人物を設定していく創作物だといえるのではないかと。

自分のキャリアは現実の問題だが、キャリアデザインをするためには、いったん過去の足跡を「都合よく」解釈することが必要になる。過去の分岐点で何故そのような意思決定をしたのか、当時は考えが至っていなかったことでも、こういう考えで決めたのだと説明することで、自身の行動に一貫性や合理的理由を見出すことができる。そして改めて前を向いて、3～5年先の未来に目標を置き、戦略を描き、物語化するのがある。主人公はあくまで自分。そして、映画と同じく、よい脚本ができたときに、最高のパフォーマンスが生まれるのだろう。